

米国コロラド州ボルダーに本部を置く、  
「ロルフ・ファー」養成の教育機関『ロルフ・イン  
スティテュート』では、認定後さらにスキル  
を向上させるためのプログラムが継続的に提  
供されている。

3年ほど前にエネルギーワーク志向の教員  
の集まりで、私のセッションをデモンストレ  
ーションしたところ、徐々に関心が高まり、  
一昨年からは米国に招かれるようになった。私  
の発展させた技法に共感しているロルフ・ファ  
ーの一人である、キャシー・コーネルが同イン  
スティテュートの機関誌でインタビュー記事  
を書いてくれた。その中で彼女は、この技法  
を取り入れることで、「自分のプラクティスの  
本質が、新しい方向に進化している」とコメ  
ントしている。また、ムーブメント教員のメ  
アリー・ポンドは、この技法を「アート・オ  
ブ・イールド」と呼んだうえで、「今の瞬間に  
完全に心を置き、繰り返し、全体をよく観  
るための探求」と表現している。こうしたコ  
メントのおかげもあって、今春のクラスも満  
席となった。

## 再びサンタクルーズへ

サンノゼ国際空港からの入国は今回信じら  
れないくらいスムーズだった。米国との行き  
来が多いこともあって、9・11の同時多発テ  
ロ以降は大概呼び止められ、2次審査室で嫌  
な時間を過ごすことが多かったが、今回は何  
の問題もなく通過。最近のサンタクルーズは、  
シリコンバレーで働くITビープルが家を建  
てるケースが増えて、地価がどんどん上がっ  
てきているらしい。

## 今回のハイライト、「問」と「吐」の 感覚

この技法は、細胞の原初的なふるまいの性

## ロルフ・ファー、再びカリフォルニアへ！

# ロルフ・フィンダ追求記。

## パート4

ロルフ・ファーの田畑さんから編集部へメールが。  
「サンタクルーズでワークショップを行ってきました」。  
クラスも人気で満席となり、さらなる手応えを得た様子。  
今回のセッション、仲間たちの反響は？

文 ● 田畑浩良 illustration by Yuri Mizutani



質を利用してはいるが、施術側の知覚やその存  
在状態に重きがある。なぜなら、具体的に立  
ち位置や見るという行為を意識的に扱うこと  
で、変容に必要な場が形成され、身体の内側か  
らの変容を促すことが可能となるからである。  
「問」や「吐」の感覚は、欧米文化には馴染み  
がないため、昨年のクラスでは、参加者がこ  
れらの概念を理解するのが難しく、ディスカ  
ッションに時間が取られる割に実りがなかつ  
た。今回日本に滞在経験のある米国人の視点  
から「問(問)」について書かれたナイスな  
記事<sup>※1</sup>をキャシーが発見してくれたので、これ  
を参考文献として配布することにした。

## クラス開幕

いつもながら、初日は特別な日で他人同士  
の初顔合わせから全体が慣れるまでに多少時  
間が必要だ。全米はもとより、サウジアラビ  
ア、カナダ、そして日本など様々な地域から  
参加者が集まってくれた。日々のプラクティ  
スを休止して、さらに受講料と旅費宿泊費を  
捻出して参加してくれていること、そしてオ  
ーガナイズを請け負ってくれた恩師・キャロ  
ル先生の期待に応えねばと思うと、否応なし  
にプレッシャーを感じる。

今回も昨年と会場は同じ、サンタクルーズ

郊外にあるスブドゥセンター。  
レベル1から再参加してくれるグレン以外  
はメンバーが全員違うせいも、クラスの雰囲気  
もだいたい昨年と異なる。自己紹介の後は、  
いよいよセッションのデモ。

最初の勇気あるモデル・クライアントとな  
ってくれたのは、ニューヨークでロルフ・フィン  
ダに加え、ヨガも教えているマヤ。まず、こ  
のワークの土台となる、全体の応答性を高め  
て、予備的に一体感を引き出すためのステッ  
プをゆっくりしていねいに示す。最小限の軽い  
タッチと、受け手との間合いを大切に、  
触れずに見守ることで、全体が同期しながら  
ゆるく状態を引き出し、受け手側が内側から  
起こす変化を待つ。

マヤの反応もよく、身体が台に沈んでいく  
反応が引き出され、次第に呼吸が深くシフト  
する中、「Wow」を連発していた。目をキラ  
キラさせながら、「新しいセンサーセッションと共  
に身体がまとまった！」との感想。周囲で観  
ていた参加生は、さして触れてもいないのに、  
変化していく様を見て、まるで狐につままれ  
たかのような様子。しかし、その後の実習で  
参加者同士ワークを交換すると、みな変化を  
しっかり体感していた。

米国人が好むディスカッションの盛り上がり



りもなく、この流れで、ロルフイング10シリーズの第1から第6セッションまでを行うための実践方法を紹介した。

「日本にロルフイングを持ち帰って発展させてくれてありがとう！」とか、「肚の感覚を使うのは初めてだったが、これは使えるね!!」というポジティブなフィードバックが多かった。特に中盤にモデル・クライアントになってくれたローレンからは、「このクラスは人生で最も核心をつく体験の一つだった」といううれしいコメントももらう。

## レベル2へ

昨年のクラスから4名が新たに加わった。ベテランのケリックは、昨年のクラスの後、スピリチュアルな深いセッションを体験したこともあって、このクラスにとっても期待しているとの自己紹介に背筋がピンとなる。旧知のサラとキャシーの合流はとて心強い。

朝から驚いたことには、レベル1と2の間の中休みを利用してビーチに泳ぎに行った参加生の2名が溺れかけたという。気がつくとも急な流れに乗ってしまったが、なんとか難を免れたらしい。しかし海水を飲むなどして呼吸器系にかかったストレスによって、二人とも朝から辛そうだった。そのうちの一人・智子さんから、デモのクライアントになりたいという申し出があった。ちょうど内臓と頭蓋骨を扱う第7セッションのテーマは、この状況にフィットしている。ワークを進めるにしたがって、口腔内や気道に広がり回復して、深い呼吸と共に肩や首の緊張も解放されていた。智子さんの楽になった姿を見て、見ている側もほっとしてきたが、何より取り返しのつかない海難事故にならずに済んで、本当によかった。

2日目のマイカへのセッションは、かなり

深い内容となり、「こんなセッションが自分のオフィスでできたらいいのに」と彼女の口から感想が漏れた。その日ホテルに戻ると、下の階が大音量の音楽と共に大いに盛り上がりしている。420と呼ばれる特別な日が関係しているようで、収まる気配がないので、端っここの静かな部屋に変更してもらい、早めに就寝する。

3日目、かなりの感情の解放を伴う深いデモになり、クライアントになってくれた参加生が、その影響で午後の実習には参加せず、休憩することになった。心配だったが、その後オーガニックな『ダーマス・レストラン』で、その参加生がベジータン謎の麵をすすっている姿を見てほっとした。

## 最終日

ありがたいことに、デモのクライアントになりたいという要望が多く、最後はジャンケンで決めることにした。勝ち残ったのは、元・技術者で日本人のこうせいさん。

最終セッションのゴールは、全身が呼吸を通して同期して一体となるような状態を引き出して、完結すること。間を取りながら、介入を続けると、こうせいさんの呼吸は吐きやすく、ゆっくりしたベースに一旦落ち着いた。反応が一段落した後、すぐ次の介入に進むのが通常だが、自分の「肚」を感じてみると、「まだ」と言われているような気がした。そこで深く落ち着いた呼吸をもう少し時間を取って味わってもらったことにした。しばらく見守っていると、普段息が



こうせいさんへの最終デモ。



『ダーマス・レストラン』での打ち上げパーティー。

※1 Agneesens, C. and H. Tahata 2012 Jun. "Yielding." Structural Integration: The Journal of the Rolf Institute® 40 (1) :10-16. ※2 2015 Nov. "Rolf Movement Faculty Perspectives". Structural Integration: The Journal of Rolf Institute 43(3) . ※3 Rolf Instituteのムーブメント教員。彼女の著書の翻訳本『感じる力からだが変わる：新しい姿勢のルール』が春秋社から出版されている。ロルファーの椎名亜希子さんによる訳。 ※4 日本では2010年以降、この技法をロルファーを中心に紹介している。「10シリーズの翻訳」と題したワークショップを修了したロルファーから、受けることができる。 ※5 Ninia Sverdrup, Ma and the four dinemntional concept of reality in Today's Tokyo. ※6 キャロル・アグネッセンズ。Rolf Institute教員(ムーブメントとロルフィンク部門)、クレニオセイクラル・バイオダイナミクスの教師としてたびたび来日。日本の最初のロルフイングリトレーニングやムーブメントトレーニングで来日して以来、日本のロルファー教育に多大なる貢献をしている。www.holographictouch.com ※7 サンタクルーズは全米に先駆け、医療目的でのマリワナ使用が許可された最初の土地としても有名。4月20日はマリファナデーとして大量消費されるらしい。 ※8 最初は、McDonaldをもじってMcDhamasという名前だったが、改名を余儀なくされたらしい。

## 田畑浩良

たはた・ひろよし ●ロルファー。(株) 林原生物化学研究所の研究員を経て、1998年より米国 Rolf Institute 認定ロルファー™としてロルフセッションの提供を開始。繊細なタッチを用いて受け手の自発的な変化を促す繊細なワークを探索し、独自の「The Art of Yield」を発展させる。2009年以降 Rolf Institute の教員として、ロルファーの継続教育に携わる。福島でのキッズ・ロルフイングリや一般向けワークショップを提供中。 www.rolfing.com



うまく入らない場所に新たに動きができて、一段階呼吸が劇的に深くなったという。その場所とは、かつて彼が気胸を患って医療処置を受けた場所だということ。あえて変化を待たせたい「間」を取ってもらったことが、この変化を引き出し、待つことがいかに大切かを身をもって実感できた、という熱のこもったフィードバックをもらう。

デモの最終段階、軽やかに歩くこうせいさんの表情は生き生きと見えて、全体から生み出されるバイブレーションを同じ空間で仲間と共有する。満たされた静寂の中で、見守っていた恩師の目が潤んでいるのが見えた。ワークショップの修了証書を一人一人に手渡す。

8日間で行ったデモの数は13、どれも集中した意味のある公開セッションだった。結果として、「間」と「肚」、そして受け手の反応を見守って待つことの重要性を示すことができたのは、大きな成果だった。今回もオーガナイズとアシストをしてくれた恩師の惜しみないサポート、そして熱心な参加者のお陰で無事クラスを終えることができた。しっかりと圧力をかける従来のやり方によるロルフイングリングの価値を認めつつも、施術する側として、そして受ける側としてもじっくりこないとというロルファーは、少なからず存在する。繊細なワーク志向のキャシーは、しばらくロルフイングリと「離婚」していたが、この技法と出会って「復縁」することができた、と語っていた。中医学でいうところの肺虚証に分類されるタイプは、皮膚への強い圧力にとても敏感であると考えられている。身体の刺激に対する感受性に多様性があるとすれば、今回集まってくれた仲間には、「同じ」種族なのかもしれない。続きを希望する声も多く、来年の夏には、本拠地ポルダでクラスが予定されている。彼らとの再会と新しい仲間との出会いも楽しみである。